先人からの 贈り物



明治。新しい時代を迎えた日本。 それまで、経験をしたことのない大転換期。 日本の未来を憂い、

そして、日本の未来に夢を懸けた先人たち。

まきかかいたく 「安積開拓」

この激動の時代を生きた先人たちの 血と汗と夢の結晶が、 今を生きる私たちに遺してくれた最高の贈り物。

この先人たちの贈り物から皆さんは何を感じるでしょうか!

【目次】

安積開拓~郡山発展の礎~	2
安積開拓の始まり~大槻原(開成山一帯)の開拓~	3
安積開拓へかける夢~中條政恒と開成社の設立~	4
国営安積開拓~明治政府による国営事業の第1号~	5
安積疏水~猪苗代湖の水を安積の地へ~	6
安積開拓に生きた人々	
①安場保和と中條政恒	7
②中條政恒と大久保利通	8
③ファン・ドールンと小林久敬	9
④ 久米正雄と宮本百合子	•••10
各藩の紹介と名残り	
①久留米藩	•••11
②鳥取藩	•••12
③岡山藩	•••13
④松山藩	•••14
⑤土佐藩	•••15
⑥米沢藩	•••16
⑦会津藩	•••17
⑧二本松藩	•••18
⑨棚倉藩	•••19
今に残る安積開拓	
① 開成館	•••20
②開成山大神宮	•••21
③ 開成山公園	• • • 22

安積開拓

~郡山発展の礎~



安積開拓を機に東北有数の都市へと発展した郡山

明治初期、戊辰戦争に敗れ、賊軍の汚名を被った東北地方は「白河から北は一山百文(※)の価値しかない」とさげすまれていました。

明治新政府が東北地方の開発を直接国の費用で実施するようになるのは、明治 10 年ごろからで、 その第1号として、この安積の大地が選ばれました。

これが世に言う「安積開拓」です。水の便が悪かったこの地で大規模な開拓を行うために、猪苗代 湖の水を安積の大地に引いた国営による安積疏水の開さく事業が行われました。

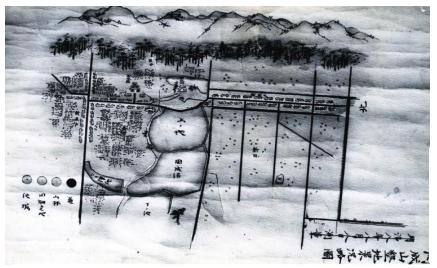
安積疏水の開さくが国営で行われることが約束されると、9藩(久留米・鳥取・岡山・松山・土佐・米沢・二本松・会津・棚倉)の士族など、全国各地から約500戸、2,000人余の人々が安積郡の諸原野に移住し、この原野を切り拓きました。

そして、これらの事業により現在の郡山(安積郡全域)発展の基盤が築かれることになりました。

※百文:江戸時代(文化文政時代)のころは、お米8合が百文ぐらいの価値とされていました。

安積開拓の始まり

~大槻原(開成山一帯)の開拓~

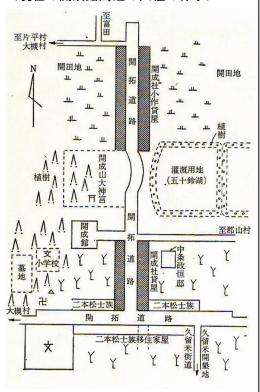


開拓当時の絵図

上ノ池-現・開成山公園(五十鈴湖)、開成沼-現・開成山球場と陸上競技場、下ノ池-現・水道局(豊田浄水場)>

桑野村の入植図

<現在の開成館周辺の入植の様子>



明治政府による開拓が決まる前、地元では、福島県と開成社による開成山一帯の大槻原の開拓が進められ、これが後の国営安積開拓へとつながりました。

言い換えると、福島県と開成社による大槻原開拓がなければ、国営安積開拓は実現しなかったと言えます。

この大槻原開拓は、明治5年、安場保和が県令(現在の知事相当職)として福島県に赴任したときから始まります。

安場は、旧米沢藩士の中條故恒を県の典事(課長職)に任命し、安積開拓の全てを任せました。 そして、士族授産を第一の目的にしたこの事業は、中條ら県官の努力のもと大槻原の一角への旧二本松藩士族の移住から始まりました。

旧二本松藩士族が入植したのは、後の桑野村で、明治6年に 移住した士族は19戸。

当初は、富田村や大槻村の古村に仮り住まいしながら開拓 地へ通って開墾を行い、翌7年に南町の開拓道路(現在の安 積高等学校前の通り)の両側に住宅が建てられ、そこへ移り住 むようになりました。その後、明治7年から同13年までに9戸が 入殖し、計28戸が開拓に従事しました。

他方、開成社は、開墾地を耕作させるため、明治7年桑野村 北町に61戸の小作人家屋を建て、同11年までにさらに41戸 が増え、全戸数102戸となりました。

そして、かつて不毛の原野だった一帯は、次第にその姿を変えていきました。

安積開拓へかける夢

~中條政恒と開成社の設立~



私財を尽くし、開拓に尽力した開成社の社長として

中條政恒と富商(阿部茂兵衛・鴨原弥作・橋本清左衛門) との会談絵図



開成社員 25 名 (前例右から5 人目が阿部茂兵衛)

中條政恒らは、旧二本松藩士の移住や安積郡の農民への呼びかけだけでは、とても目的を達成できないため、民間参加による開拓を同時進行の形で進めました。

これは、江戸時代後期から宿場町として栄えた郡山宿の富裕な商人の出資による開拓会社を組織し、多くの開拓移住者を募集するというものでした。

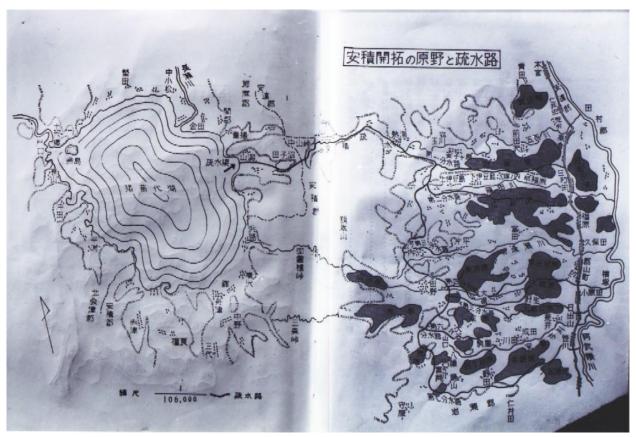
中條は、郡山の商人を集め開墾を力説しましたが、商人たちは開拓事業については全くの未経験であり、「商売以外に手を出すな」という家訓があったこともあり、開拓事業には乗り気ではありませんでした。

それでも中條は、地元の富商らと会談し、「それぞれ富豪といっても、村のため、国のために、尽くすことがなければ、守銭奴と侮辱されることを免れることはできない」と開拓の必要性を説きました。

この中條の情熱に心を動かされた阿部茂兵衛など25名の富商によって結成されたのが、安積開拓成功の鍵となった開成社です。

国営安積開拓

~明治政府による国営事業の第1号~



猪苗代湖からの疏水路と安積郡原野

明治になり、旧武士たちは士族と呼ばれていたものの、生活は困窮を極めていました。士族の生活の窮迫と新時代への不平から、西国では反乱が相次ぎ士族の救済は急務となっていました。大久保利通をはじめ、時の政府要人たちは、世界との差を実感し、国の未来には殖産興業※1と士族授産※2が必要不可欠と考え、産業を興し、士族救済の政策を実施していきました。

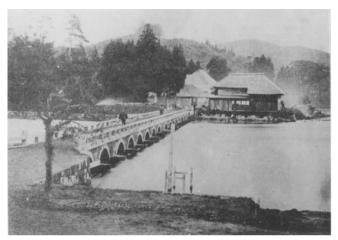
そのような折、明治9年の明治天皇の東北巡幸に先んじて下検分に福島・郡山を訪れた大久保に中條政恒が福島県と開成社による大槻原開拓事業の成功、そして、国営安積開拓の必要性を力説しました。

その熱意を受けた明治政府は、安積開拓と猪苗代湖から水を引く安積疏水事業に乗り出しました。 政府が、本格的に士族移住に取り組むのは明治11年からで、県内では二本松・棚倉・会津、県外 では九州の久留米、四国の高知・松山、中国の鳥取・岡山、そして東北の米沢の9藩の士族など、全 国から約500戸2,000余人が移住してきました。

- ※1 殖産興業:明治政府が西洋諸国に対抗し、産業や資本主義の育成により国家の近代化を推進した さまざまな政策を言います。
- ※2 士族授産:職を失った士族の救済のためにとられた明治政府による一連の政策を言います。 〈例〉農・エ・商業への転職の推進、官有林や荒地の安価での払い下げなど

安績疏水

~猪苗代湖の水を安積の地へ~



旧・戸ノロ十六橋水門(明治13年に完成した当時の十六橋)



「安積疏水麓山の飛瀑

安積疏水完成時



(国指定の登録有形文化財現在の麓山の滝



新・戸ノロ十六橋水門(大正3年に改築した現在の十六橋)

水利の良くない安積平野の開拓を成功させるためには、猪苗代湖の水を安積の地へと引く安積疏水の開さくが必要不可欠でした。

しかし、明治11年5月、時の政府の実力者で安積疏水の最大の理解者であった大久保利通が凶刃に倒れました。この朝、生前の大久保が最後に会っていたのが、当時の福島県令(現在の知事相当職)の山吉盛典でした。大久保邸を訪れていた山吉は、その会談で初めて、安積開拓が正式に実施されることを知り、「済世遺言」という大久保との会見記に、大久保の遺言として、安積疏水開さくの効用を記し、これを関係の閣僚に送りました。大久保の死後、一時政府の安積開拓事業への関心が薄れましたが、中條政恒の熱意により、次の内務卿・伊藤博文らに引き継がれていきました。

政府は土木寮の長工師という技術者の最高位の職にあったオランダ人のファン・ドールンに沼上峠のコースを検討させ、その調査結果に基づきルートを沼上峠コースと決定し、明治12年10月に開成山大神宮で起工式を行いました。

疏水工事は、延べ85万人、3か年の歳月を費やし、明治15年8月に完成しました。疏水の通水式は、同年10月1日に開成山大神宮広場で開催され、右大臣岩倉具視、参議松方正義、西郷従道農商務卿などの政府高官が参列しました。祝賀会は麓山公園で開かれ、宴会では洋食が出されました。園内には数百の球燈(ちょうちん)を掲げ、山車を備えて歌舞伎が催され、花火200発が打ち上げられるなど、郡山村と桑野村は今だかつてない人出で賑わいました。

~安場保和と中條政恒~



開拓の先見者「安場保和」



安積開拓の父「中條政恒」

安積開拓の原点である大槻原(開成山一帯)の開拓は、安場保和が明治5年に福島県に赴任してきたときから始まります。

安場は、熊本藩士で、幕末に郡山出身の安積良斎塾の生徒名簿に名を連ねた人物であり、明治4年には遣米視察団の一員として、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文などとアメリカへ渡った開拓の先見者でした。

県令(現在の知事相当職)となった安場は、旧米沢 藩士・中條政恒を県の典事(課長職)に任命して大槻 原の開拓に当たらせました。

中條は、米沢藩主へ北海道開拓を強く主張していた人物で、北海道開拓に大きな夢を描いていましたが、その夢は実現しませんでした。

アメリカの広大な開拓を目の当たりにし、日本における開拓の必要性を感じていた安場と開拓の夢を描いていた中條の運命的な出会いが、安積開拓という 大事業を成し遂げることになりました。

~中條政恒と大久保利通~



中條政恒と大久保利通の会談図

明治9年、中條政恒は明治天皇の東北巡幸の先発として来県した大久保利通の福島の宿舎を訪ねました。

そこで、中條は、県の事業として開成山の開拓や桑野村が立派にできたこと、さらに安積野の全域に開拓を拡大すること、そして、そのために、猪苗代湖の水を安積の地に引く事業を国の費用でやってもらいたいということを強く大久保に訴えました。

もともと殖産興業と士族授産が持論であった 大久保の考えと中條の要望は、一致しました。そして、この二人の出会いから、国営安積 開拓と安積疏水開さく事業がスタートすること となります。

帰京した大久保はさっそく内務省から二人の調査官を東北に派遣し、大規模な開拓に適する原野の視察を命じました。二人は青森県の三本木原から栃木県の那須野原まで詳しく調べ、その結果、安積の諸原野が最適地であると政府に報告しました。政府は、安積の諸原野の開墾を決定し、猪苗代湖の水を引くことに加え、士族の移住計画を内定しました。



時の実力者であった内務卿・大久保利通

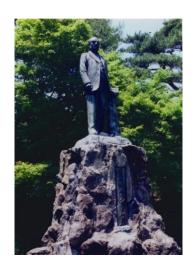


中條政恒

~ファン・ドールンと小林久敬~



コルネリス・ヨハネス・ファン・ドールン



ように佇むファン・ドールンの像はるか安積平野までも見つめているかの戸ノロ十六橋の畔で猪苗代湖を見下ろし、



猪苗代湖の東注に生涯を懸けた「小林久敬」 荒池公園南側の愛宕神社にある



ファン・ドールンはオランダの技術者で、明治 5 年に来日し、土木寮の長工師という技術者として最高位の職にあった人物です。明治政府は、疏水のコースとして沼上峠案をファン・ドールンに検討させました。

明治 11 年 11 月、沼上峠のコースを調査したファン・ドールンは、沼上峠のコースを「天の与えるところ」と高く評価し、湖水の自然水位を変更することなく、安積地方に水を引くことができることを学術的計算から立証しました。これによって、政府は疏水のコースを沼上峠と決定しました。

一方で、猪苗代湖から水を引くことは、地元の人々の間でも前々から考えられていました。なかでも、 小林久敬は、幕末から疏水開さくを提唱し、自ら測量するなど全財産を投じて斉木峠案を主張し、沼 上峠コースが決定するとこれに反対し、東京に移り住んでまで政府に陳情などをしました。

全財産を投じ、無一文となっても猪苗代湖からの疏水に生涯をかけた小林久敬は、疏水完成を目の当たりにし、「あらたのし 田毎にうつる 月のかげ」という感慨の句を残しました。この句碑は荒池のほとりの愛宕神社に今も建っています。

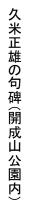
~久米正雄と宮本百合子~



久米正雄



宮本百合子





宮本百合子の文学碑

安積開拓が育んだ二人の作家。それが、久米正雄と宮本百合子です。久米と百合子は、祖父の縁もあり幼少の頃から顔見知りでした。

久米は、明治24年に長野県で生まれましたが、父親が亡くなり、立岩一郎(中條政恒が最も信頼した人物)の娘であった母親の実家である郡山の桑野村開成山に移り住みました。開成小学校、金透高等小学校、安積中学校(現・安積高等学校)で学んだ久米は、安積中学の頃から俳句に親しみ、久米三汀として頭角をあらわしました。

そして、東京大学に進み、菊池寛や芥川龍之介らと出会い、作家として小説・戯曲の分野でも一流となりました。久米の初期の作品には、郡山を題材にしたものが多く、『牛乳屋の兄弟』は安積開拓の中心地であった開成山の牧場をモデルに描いた社会劇で、ほかにも『三浦製糸工場主』『阿武隈心中』などがあり、郡山の近代化の様相と人々の姿を描いています。

百合子は、明治32年に東京で、中條政恒の長男・精一郎の長女として生まれました。中條政恒は、村人の懇情により明治30年に桑野村に帰り住みました(このとき立岩一郎が村長)が、その3年後、59歳で亡くなりました。

百合子は、夏休みに祖母の住む開成山に度々遊びに来ていて、開拓村の小作人の貧しい生活ぶりを目の当たりにしました。裕福な家庭で育った百合子は、貧富の差があまりに大きいのに驚き、彼女の清純な心で開拓農家の貧しい生活をありのまま克明に描いたのが、デビュー作『貧しき人々の群』です。ほかにも開成山を舞台とした小説に、『伸子』『播州平野』などがあります。

ク留米藩 <九州福岡県>





市音

藩旗 (左三ツ巴)



久留米水天宮(大蔵壇原・南久留米)



水天宮(対面原・喜久田町)



久留米開墾説教所(大蔵壇原・南久留米)



金刀比羅宮(対面原・日和田町)

国策による入植の第1陣となったのは、明治11年11月に郡山に着いた久留米士族でした。 大久保利通は、国営安積開拓の第1陣に久留米藩難事件※の関係者を勧誘しました。

リーダーの森尾茂助は、上京していた中條政恒と面談し、安積野移住の腹を固めて、郷里久留米に帰り同士を集めたところ、趣旨に賛同する同志が続出しました。

久留米士族は、郡山南部の大蔵壇原(現・久留米地区)に入植しましたが、その後も希望者が絶えないので、北部の対面原(喜久田町・日和田町)にも入植し、久留米開墾社を結成しました。

しかし、入植戸数最大で強固な団結を誇った久留米開墾社も後に内紛が起こり、南久留米(大蔵壇原)と北久留米(対面原)に分離することになりました。現在でもそれぞれ「久留米」という名が残されています。

南久留米開墾地の中央の小高い丘には、立派な「水天宮」が祀られています。これは、明治15年、移住 士族たちの願いによって、故郷の水天宮分霊を奉祀したもので、100年以上にわたって久留米人の守護 神として崇められてきました。また、北久留米にも同じく「水天宮」が祀られ、ここには、ほかにも久留米からの海路の守り神が金刀比羅様であったということで、「金刀比羅宮」が祀られています。

昭和50年8月3日、安積開拓の縁により、久留米市と郡山市は姉妹都市となりました。

※明治4年、久留米藩が長州で暴動を起こした首謀者をかくまったとして、旧藩主以下が政府から罰せられた事件

鳥取藩

<中国鳥取県>







藩旗(丸に揚羽蝶)



宇倍神社



旧坪内元興家住宅(開成館敷地内)

郡山駅前から旧会津街道を通り、磐越西線喜久田駅の少し手前に行くと「十四戸」というバスの停留所があります。これは昔、広谷原といわれたこの辺りに、鳥取士族の開拓者が14戸入植したためにできた地名です。

喜久田町には、このほかにも「三戸・十五戸・十二戸・三十戸」と呼ばれる集落名があります。これらは全て同じ理由からできた鳥取開拓の地名です。

鳥取開墾社は、旧鳥取藩の上級士族を網羅して結成した組織、鳥取「共立学舎」の幹部今井鉄太郎が、明治12年、政府の勧奨をうけ単身現地視察に来県しました。そして、帰郷すると、共立学舎を中心に移住計画を立て、明治13年1月、先発隊として今井と坪内元興・仙台吉衛の3人が移住しました。その後、鳥取の士族69戸約300人が、ここに移住したのは、明治14年。

鳥取士族の心の拠り所となったのは、地元鳥取の宇倍神社の分霊を奉仕した「宇倍神社」でした。 実は、安積開拓で入植した鳥取士族の資料は、長い間火災で焼失したと思われていました。しかし、 平成7年、当時、ラーメンの研究のため福島を訪れた鳥取女子高校(現・鳥取敬愛高校)社会部の生 徒と顧問の教諭が、偶然にも宇倍神社の社務所から大量の「幻の資料」を発見したのです。これをき っかけに、両市の間で新たな交流が始まり、平成17年11月25日に姉妹都市となりました。

岡山藩

<中国岡山県>





藩旗(揚羽の蝶)



入植者の碑

岡山士族は、明治13年12月28日に小松健太郎など10戸が開墾を許可されました。小松(日置) 健太郎、日置尚、中根冷、丹羽常太郎は入植したという資料が残っていますが、10戸入植したかどう かについては不明となっています。岡山士族は喜久田町堀之内と安子島駅のちょうど中間で、国道4 9号の南側一帯にあたる対面原に入植しました。

地元では岡山士族が入植した辺りを「備前開墾」と呼んでいます。

岡山開墾の中心人物であった日置健太郎は、岡山藩主池田侯の二男で、「同氏はもと2万5千石を食む砦主にて、日置と云へる者なり。故あって、小松と称し農事を志す。その苦難に堪えゆる精神は見る者感ぜざるなし」(『分草実録』)とその身分の一端を明らかにしています。彼が対面原に移住したのは27歳のときでした。

旧大名の二男という身分ながら、長男尚を伴い自ら開墾の鍬を振るい、乳牛を飼って牧場を営んでいたのは異例です。

『三国巡覧概記』によると、「健太郎自ら耕馬を飼い、馬耕に従事しその妻炊飯雑役を司る。健太郎とともに移る3戸、またよく勉強、3年後には田畑20町歩を耕し、収穫多く開墾所中冠たりというべきである。」とあります。

日置一家は明治30年に転出。その後、健太郎は男爵を授けられ外交界で活躍しました。また、中根家も日置一家と同年、丹羽家は3年後の明治33年にそれぞれ転出し、以後岡山人は全く安積原野から姿を消しました。

松山藩

<四国愛媛県>





藩旗(丸に三葉葵)





三嶋神社

大久保卿の顕彰碑(大久保神社)

松山士族の愛媛開墾社は明治14年の春から動き出し、明治15年5月に15戸が、牛庭原(安積町)に入植しました。その後、同16年に1戸、さらに同17年、愛媛人ではあるが東京在住の田中利助・大川鋳之助が加わって、総数で18戸となりました。

松山士族がこの原野に入植したころは、ここは全くの無人地域で、原野に入り込んだ細い谷間に、 自然水による古田が僅かばかりあったにすぎません。

松山士族は他藩の士族と同様に農業は無経験でしたが、東京駒場農学校の試験場で耕種の仕事をしていた田中利助や、開成山農学校の教師をしていた飯田定一の指導のもと、作物の選択や肥培管理を行い、種甘藷(サツマイモ)を駒場から取り寄せ、安積の地で初めてサツマイモの栽培を成功させるなど、農業上の改良や農作物の栽培方法は他の開墾地に類を見ないほどでした。これは、田中・飯田の努力によるところが多かったといえます。

牛庭原開墾地の南部には、「大久保公園」があります。これは、安積開拓に尽力した大久保利通の 功績を顕彰して名付けられたもので、その一角に大久保利通を祀った大久保神社と呼んでいる顕彰 碑が建っています。また、集落内には伊予の三嶋神社の分霊を祀った「三嶋神社」もあります。

土佐藩

<四国高知県>





藩旗(丸に三葉柏)





豊受神社

八菅神社

安積野における士族開墾のうち、高知士族はその移住戸数から見て久留米士族に次ぐ大世帯でした。高知士族は、明治14年から3回にわたり、広谷原(喜久田町・富田町・富久山町)に71戸、山田原(逢瀬町)に20戸、赤坂(逢瀬町)に15戸に分かれて入植しました。広谷原に入植したのは「高知開墾社」、山田原・赤坂に入植したのは「高知協力組」。

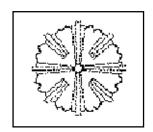
広谷原は東西に細長いゆるやかな丘地で、その東北側に鳥取開墾、西南側に高知開墾社が移住 し、高知開墾社は、東原に20戸、中原に25戸、西原に26戸と分散して部落を作りました。

山田原は安積平野の最西端で、奥羽山脈の山懐にあたる地域で山麓台地であったため、水田を開くことは困難でした。山田原は郡山から西に多田野を経由し、三森峠をこえて湖南から会津に通じる要地だったため、駅逓(宿場から宿場へ荷物を送り届ける拠点)が置かれ、その物資の管理や人夫として働くことで開拓民は生計を立てていました。しかし、明治32年岩越鉄道(現・磐越西線)が開通すると、山田原の駅逓としての生命はたちまち失われ、その収入は激減しました。

高知から広谷原に移住した人たちは、はじめ富田村の西原に伊勢神宮の遥拝所を設けていましたが、その後明治24年に食物・穀物を司る神である豊受大御神を祀る「豊受神社」を奉遷しました。他方、山田原では、「八菅神社」を祀っています。これは、移住してきた高知士族たちは菅原道真を奉斎し、付近の北沢にあった2戸が昔から八幡太郎を祀っていたことから、これを合祀して八幡と菅原の一字ずつをとって八菅神社としたものです。

米沢藩

<山形県>







藩旗(竹に雀)



入植者の碑

安積開拓の中心人物は中條政恒をはじめ、開拓所の県官立岩一郎・石井貞廉はいずれも米沢士族でした。時の福島県令山吉盛典もまた米沢士族出身であったことからも、安積開拓を指導した中核は米沢士族グループによって行われたといっても過言ではありません。山吉県令については文献が残されています。中條政恒と安積開拓との関係については、主に中條の資料を基に記述した『安積事業誌』に詳しく記されています。また、立岩一郎には『分草実録』という彼の著述があり開拓時代の貴重な資料となっています。

しかし、米沢開墾人による四十壇原開墾の実態については、驚くほど資料が乏しく不明な点が多くあります。

中條などの役人とは別に、移住開墾人として米沢士族10人が四十壇原(三穂田町駒屋)に入植したのは他藩より遅い明治16年でした。しかし、四十壇原は、起伏の多い低い丘陵地で恵まれた土地ではなかったこともあり、明治25年ごろの各士族開墾所の統計類を見ると、すでに四十壇原の米沢開墾人(東北開墾社)は姿を消しています。

四十壇原の米沢開墾人が、にわかに退去者が続出し、1人を除いて跡形もなく開墾地から姿を消した理由は明らかではありません。

会津藩

<福島県>





藩旗(丸に三葵)



大槻・南原の会津士族開拓記念碑

戊辰戦争に敗れ、悲惨な落城を迎えた会津藩士は、明治2年、藩主松平容保の子容大が青森の 斗南3万石に封じられたので、藩主に従い家族を連れて斗南に移住しました。不毛の地斗南での彼ら の生活は苦労が続き、栄養不良から乳幼児が北寒の荒野に倒れ、多数の藩士の暮らしは貧しさの 極限状態でした。旧藩士たちは斗南で帰農する事が極めて困難だったことから、明治6年の秋までに は大部分が会津に帰郷しました。

明治14年、安積郡の大槻南原に移住した人の中には、斗南からの帰国者が多く、戸籍面では斗南藩士となっています。彼らは、明治14年2月家族を連れ、三森峠を越えて安積の地に第一歩を踏み入れましたが、峠の途中で猛烈な吹雪に見舞われて路を失い、かろうじて郡山に到着したと伝えられています。その主力は南原(大槻町)に入植した1団・13戸でした。はじめは32戸全部が南原に入植する予定でしたが、入会地の少なくなることを恐れた付近の農民が、会津士族移住の風聞がはいると猛烈に反対したため、十分な広さが得られず、駒屋北原(三穂田町)3戸、塩の原(三穂田町)15戸、湯の原(三穂田町)1戸とやむなく分離入植しました。分離組は泣き泣き別れていったといいます。

会津士族が入植した諸原野は、地形水利が悪いために原野として残されていた所で、資金難で疏水路の完成がずっと遅れたため、非常な困難に見舞われ残存者はわずかにすぎません。

二本松藩

<福島県>

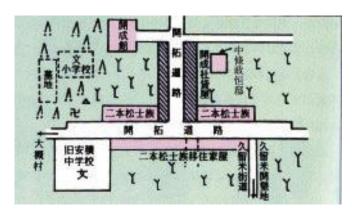




藩旗(直違紋(通称 違い棒)



大槻原二本松藩の入植者の碑



大槻原開拓時の二本松藩入植図

二本松藩は、戊辰戦争で城下が焼かれ、多くの戦死傷者を出し、家財を失い、県内では会津藩についで悲惨な境遇に置かれ、多くの士族は家族を抱え生活に窮迫していました。明治6年、県は、独自の立場から士族授産を図り、県の勧誘により二本松士族19戸が大槻原開墾の一部に移住しました。彼らは安積野士族開拓の草分けです。

後に桑野村と呼ばれた地域は、明治7年には南町(現在の安積高等学校前の通り)の8間(約14.5m)の開拓道路を挟んで住宅が建てられました。南町・台新田・鶴見坦・菜根屋敷などの一帯は、この人々によって拓かれたものです。その後同7年から12年の間に9戸が移住し、県独自の開墾政策による移住は計28戸となりました。

これとは別に、明治14年に政府の開墾政策によって、二本松士族11戸が対面原(日和田町)の一部に入植しました。しかし、彼らに割り当てられた土地は高知や久留米士族の半分に過ぎず、明治の末年までには大半が没落し開拓地を去ることとなりました。

さらに、二本松士族の一団は、安積平野の北端青田原(現在の本宮市の一部)にも入植しましたが、 対面原同様、ほとんどがこの地を去ることとなりました。

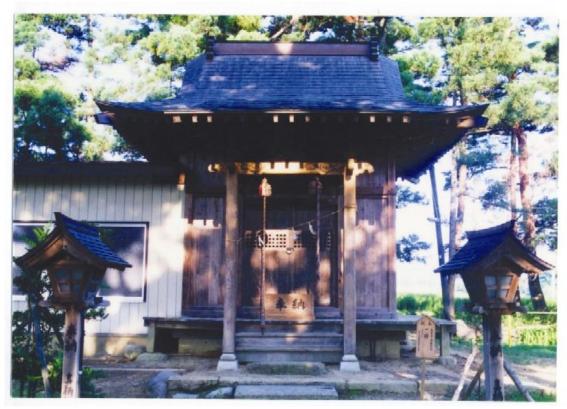
棚倉藩 〈福島県〉





町章

藩旗(丸に違い鷹羽)



三柱神社(棚倉藩・対面原〈喜久田町〉)

棚倉士族は明治14年1月から8月にかけて、対面原の最西端、喜久田駅と安子島駅のほぼ中間、会津街道に面した一帯に移住しました。今でも、喜久田駅から2キロほど北西に「棚倉」というバス停があります。しかし、分割する土地が足りず、移住した27戸のうち3戸は少し東に離れた掘切前、7戸が見陣原(喜久田少学校の東部一帯)に分散して入植しました。

棚倉開墾に割り当てられた土地は、久留米や高知の移住者の半分にすぎず、土地の絶対量が足りない上に、当初は収穫が肥料代や人夫賃に追いつかず、毎年の赤字で負債が増加していきました。 しかもこの開墾社は共有山林が全くなかったことから、後々まで燃料にも悩まされました。

棚倉開墾地には、「三柱神社」が現存しています。明治17年に移住者が社殿を建築したもので、「お互いの心を統一し、団結を強固にする」ためと、開墾に当たって神の御加護を祈ったものと思われます。

今に残る安積開拓

~ 開拓ゆかりの施設 < 開成館 > ~



現在の開成館



旧立岩一郎邸



旧小山家住宅(旧松山藩)



旧坪内家住宅(旧鳥取藩)



建設当時の開成館と周辺の様子

郡山の発展の礎となった安積開拓を現在に伝える 開成館。開成館では、安積開拓にまつわるさまざまな 資料を見ることができます。また、敷地内には、復元し た当時の開拓者住宅(旧小山家住宅・旧坪内家住宅) や官舎(旧立岩一郎邸)もあります。

開成館は、明治7年に郡山で初めて洋風を取り入れた建物として建築されました。まだ地方に洋風工法が伝わる以前に建てられた擬洋風の三層楼で、当時としては豪華な建築物です。開拓村の人たちはこの白亜の殿堂を「三階」と呼んでいました。これは、県庁移転の際の庁舎にしようとの考えもあったといいます。

開成館の名前は、安積開拓の父・中條政恒により命名されました。

開成館は、区会所(郡役所の前身)として建てられ、その後は郡役所、県立農学校、桑野村役場などに使用され、大正初期には久米正雄一家がこの一隅に住んだこともありました。明治9年の明治天皇東北行幸の際には、行在所(宿泊所)として使用され、昭和8年には国史跡に指定されました。戦後指定は解除、住宅難の解決策として市営住宅にも使用され、荒廃した時期もありましたが、昭和35年、県の重要文化財に指定され、同41年に補修・修理されて以来、資料館として現在に安積開拓の歴史を伝えています。

今に残る安積開拓

~開拓ゆかりの施設く開成山大神宮〉~



開成山大神宮



開成山の碑



安積野開拓顕彰碑(9藩の石が礎になっています)



中條政恒の顕彰碑



阿部茂兵衛の銅像

明治6年春、大槻原開拓の第一歩を踏み出してまもなく、中條政恒は、民情を和らげ、離散しやすい人心を統一し、開拓者に精神的慰安を与えるために、「遥拝所」※の設立を計画しました。明治7年に社殿・拝殿が造営竣工すると、これを神社に改めることになりました。中條は、開拓者の精神的な拠り所とするため、開拓民の総意で伊勢皇太神宮の御分霊を奉遷したいと神宮司長に願い出ましたが、当時皇太神宮の分霊を遷した例はなく、東京・横浜も遥拝所に過ぎなかったため、簡単に許されませんでした。

しかし、その後の中條の働きかけにより、ようやく明治9年太政大臣名で伊勢皇太神宮御分霊の奉遷が「私祭」とし、社格を県社とすることを条件に許可されました。

名前は、もともとは「岩代大神宮」として申請しましたが許されず、やむなく「開成山大神宮」となりました。以来、開墾者の崇敬を集め、現在でも「東北のお伊勢さま」として慕われています

※遥拝所:遠方から祈願を済ませられる場所

今に残る安積開拓

~ 開拓ゆかりの施設<開成山公園>~



開成山公園周辺の様子



開成山公園の桜



群像(モニュメントにある開拓に尽力した人々)

モニュメント開拓者の群像

開成山付近には、昔から上ノ池と下ノ池という ため池がありました。開拓事業が始まり、かんが い用の池としてこれらの池を改修し、五十鈴湖 (現在の公園)と開成沼(現在のグラウンド)がつ くられました。下ノ池の一部は、現在の豊田浄水 場(水道局の池)です。久米正雄の俳号である三 汀は、この三つの池に由来します。

そして、当時池の土堤には、山桜2.856本、ソ メイヨシノ・八重桜1.036本が植えられました。今 もこの先人の遺してくれた桜は春になると美しい 花を咲かせます。

この桜にはこんなエピソードがあります。開成 社長であった阿部茂兵衛は自らの手で桜の苗を 植えていました。ある人がその姿を見て「あなた は、この桜の花を見られますか。」と尋ねました。 茂兵衛は「桜は孫子の時代のもの。必ず町の名 所として賑わいを見せる。」と平然と答えたといい ます。

また、公園の自由広場にそびえるモニュメント 「開拓者の群像」は、「安積開拓精神の未来への 創造」をテーマに、平成4年に郡山市の名誉市民 である故・三坂耿一郎氏により制作されました。 ここには、中條政恒、阿部茂兵衛、大久保利通、 そして開拓民らの姿と原野に生きたクマ、サル、 シカ、ウサギなどが描かれ、前方には安積疏水 をイメージした水路が流れています。

